第24回ふるさと歴史館企画展

廣瀬栄一コレクション

瓦 編

東城寺（土浦市）

結城廃寺跡
（結城市）

下総国分寺跡
（千葉県市川市）

前峰廃寺跡
（つくば市）

姫路城
（兵庫県姫路市）

現在の廣瀬商店の様子

銘酒「白菊」と廣瀬栄一

石岡市高浜にある廣瀬商店は文化２年（1805）にはすでに酒造業を営んでいたと伝わり，その銘柄「白菊」は広く知られています。その廣瀬商店５代目・慶之助の後を継ぎ，６代目となったのが廣瀬栄一です。栄一は家業の経営の傍ら文化財にも興味を持ち，その保護保存に尽力しました。日本人類学会や日本博物館協会において評議員を務め，石岡市内では常陸国分寺跡に関する論考も執筆しています。戦後は「白菊古文化研究所」を設立し発掘調査をしながら考古学者の育成に尽力しました。

今回は廣瀬家から寄贈を受け，石岡市が所蔵する資料のうち古代から近世にかけての瓦を紹介します。

令和３年１月６日（水）～３月28日（日）

開館時間　午前10時～午後４時30分

月曜休館（祝日の場合は翌日）入館無料

石岡市立ふるさと歴史館

石岡市総社１－２－10　石岡小学校地内　Tel：0299－23－2398

石岡市立ふるさと歴史館　第 24 回企画展

廣瀬栄一コレクション ―瓦編―

◆目次

はじめに	1
白菊と廣瀬家	2
廣瀬栄一と文化財	3
廣瀬栄一による伽藍御堂の報告と発掘調査	4
今回の展示に関係する寺院・古代中世の遺跡	6
「新治廃寺跡」出土瓦	7
「下谷貝廃寺跡」「源法寺廃寺跡」出土瓦	9
「中台廃寺跡」出土瓦	10
「東城寺」出土瓦	11
「台渡里廃寺跡」出土瓦	12
「結城廃寺跡」出土瓦	14
「下総国分寺跡」「下野国分寺跡」「上野国分尼寺跡」出土瓦	15
中世の瓦（１）　巴文軒丸瓦	16
中世の瓦（２）	17
中世の瓦（３）	18
姫路城－近世の瓦－	19
おわりに	20

◆例言

・本冊子は，令和 3 年(2021)1 月 6 日～3 月 28 日を会期として開催する石岡市立ふるさと歴史館第 24 回企画展に際して作成したものです。
・展示及び本冊子の編集・執筆は，石岡市教育委員会　文化振興課（小杉山大輔）が行いました。
・参考文献等は 20 ページに記載しました。

はじめに

『石岡市史』によると石岡市における文化財保護の歴史は古く，手塚正太郎による活動がその最初のきっかけとなるようです。手塚は明治２２年（１８８９）に茨城県最初の図書館を設立，さらに歴史資料の収集にあたる一方で郷土史研究に取り組みました。

その影響を受けた山口誠太郎・今泉義文・手塚敏郎といった人物たちにより昭和８年（１９３３）に石岡町史蹟保存会が結成されました。さらには昭和 36 年（１９６１）に刊行された『図説石岡市史』の執筆には深谷重雄や中島実といった郷土史家が名を連ねています。

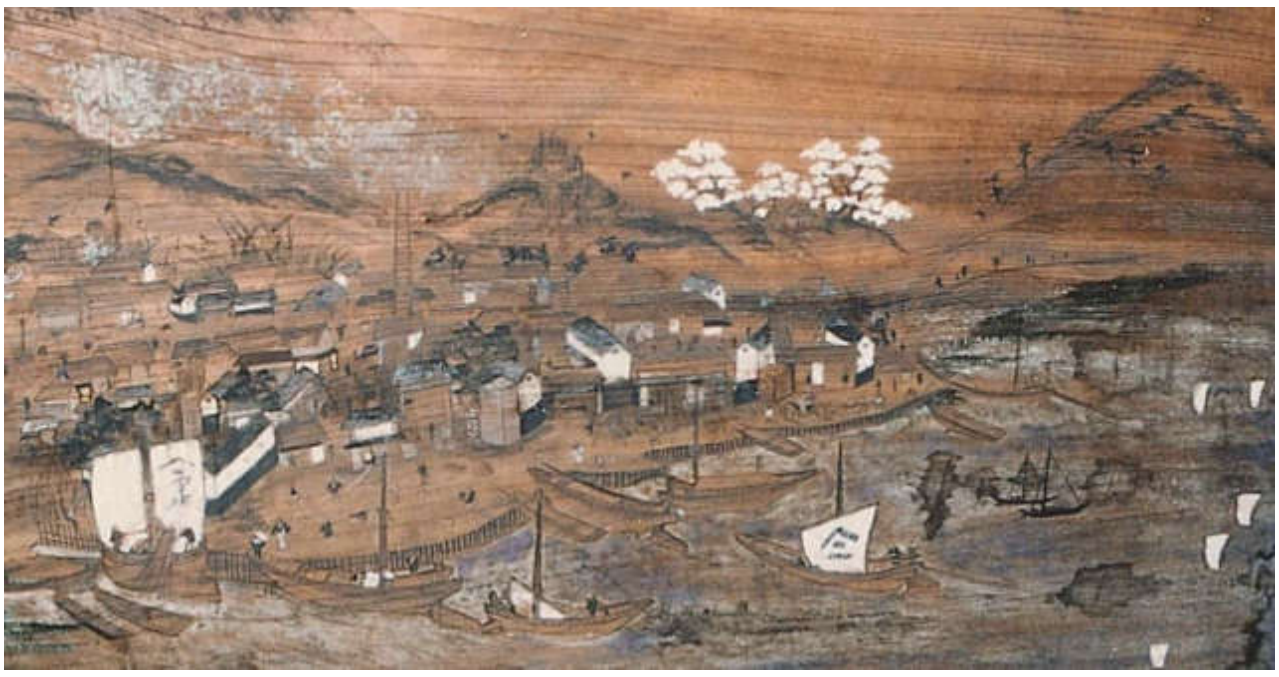
このような中で高浜地区において文化財の研究や保護に関する取り組みを積極的に行ったのが廣瀬栄一です。今回の展示にあたり，その業績とともに石岡市に寄贈されている多くの文化財のうち古代から近世にかけての「瓦」を紹介いたします。石岡市の市民と文化財のかかわりを少しでもご理解いただければ幸いです。

最後になりますが，今回の展示にあたりましては合資会社廣瀬商店の７代目・廣瀬淳一様と８代目・慶之助様より多くのご教示及びご協力を賜りました。心より御礼申し上げます。

白菊と廣瀬家

石岡市高浜にある廣瀬商店は江戸時代の文化２年（１８０５）にはすでに酒造業を営んでいたと伝わり，その銘柄「白菊」は広く知られています。高浜神社に奉納されている慶応年間の絵馬には「八」の下に「二」と描かれた帆舟があります。これは「やまに」と読み，廣瀬商店の屋号であることから当時から廣瀬家が高浜において中心的な存在であったことが分かります。７代目・淳一様のご教示によると高浜は旗本領であったことから４代目・彦兵衛は領主の一人である小野家出身の山岡鉄舟とも交流があったとのことで，それを示すかのように高浜神社は鉄舟の書を所有しています。鉄舟は初代茨城県知事となると兄・小野古風が居住する高浜にも度々訪れたとのことです。古風は明治維新後，高浜で塾を開き，さらに高浜小学校の初代校長となります。

『石岡市史』によると５代目の廣瀬慶之助は明治４１年（１９０８）高浜に火力発電所を設立し石岡・行方方面に送電します。また大正１３年（１９２４）には高浜・三村耕地整理組合の発起人となり当地区の干拓にも貢献しました。



高浜神社に奉納された絵馬（左）と高浜・三村耕地整理組合の記念碑（右）

廣瀬栄一と文化財

そのような中で６代目となったのが廣瀬栄一（明治３８年（１９０５）生まれ，平成３年（１９９１）没）です。やはり７代目・淳一さんのご教示によると栄一は立教大学に進学する一方で考古学や人類学に興味を持ち，考古学は原田淑人（はらだよしと）に人類学は長谷部言人（はせべことんど）に師事したそうです。栄一はこの縁からか経営の傍らで日本人類学会や日本博物館学会で評議員を務め，ストックホルムで開催された世界博物館会議やスミソニアン生誕記念祭などに日本代表として参加しています（『石岡市史上巻』より）。石岡市内での業績に目を向けると，昭和１３年（１９３８）年に常陸国分寺跡の塔跡と推測されている伽藍御堂の状況について報告しています。戦後は「白菊古文化研究所」を設立し，東海地方において発掘調査を行い，中学生を参加させるなど後進の育成にも取り組みました。名古屋市博物館には栄一の 40,000 点にのぼるコレクションが寄贈されています。

白菊古文化研究所による発掘調査報告書（左）と廣瀬家所蔵の武人埴輪（右：国指定文化財）

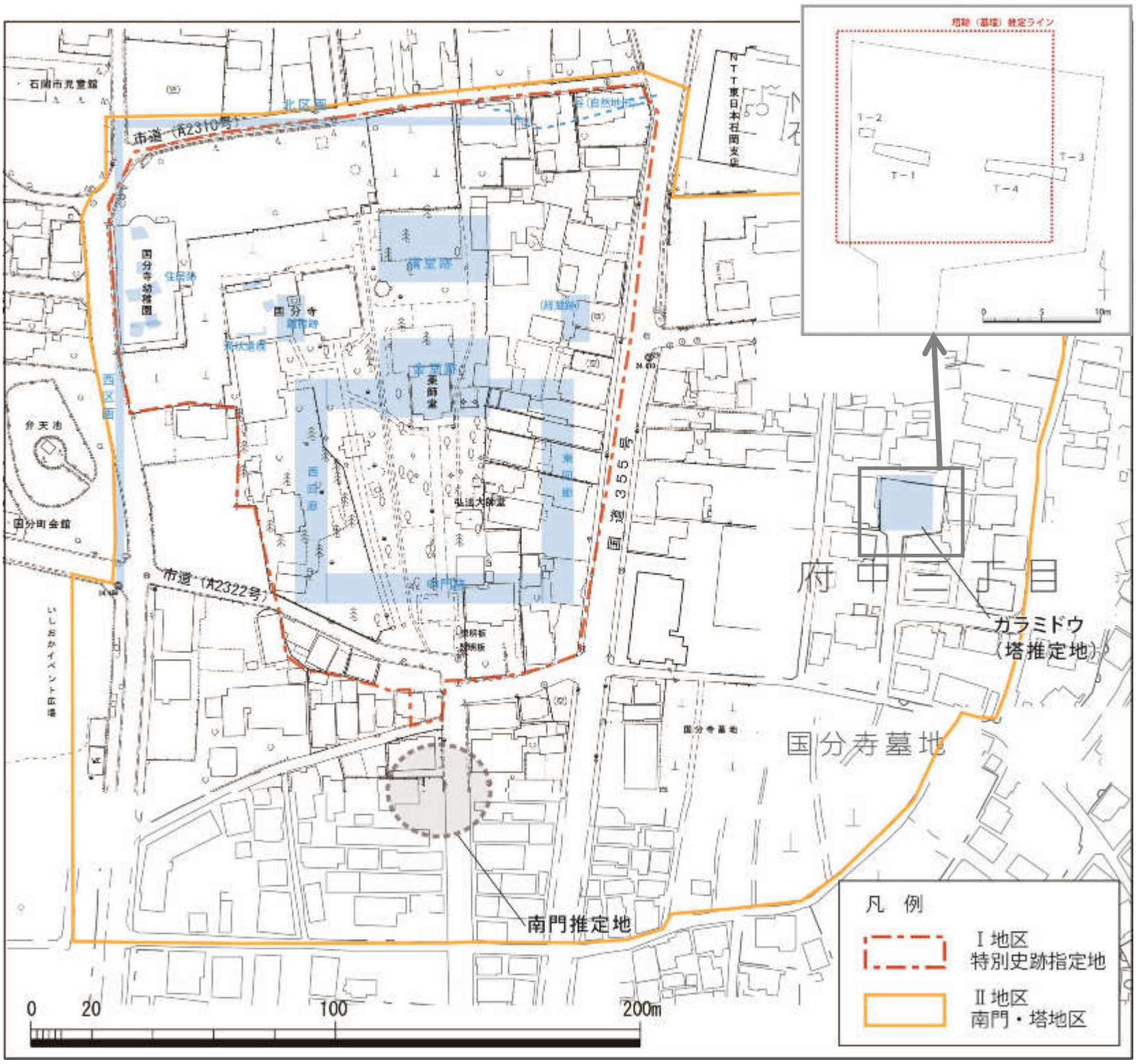
廣瀬栄一による伽藍（がらみどう）御堂の報告と発掘調査

廣瀬栄一の県内の活動として茨城県文化財専門委員として名前が確認できます。『茨城県の文化財』は毎年，県教育委員会が刊行している年報でその第１巻に著者として参加しています。また，昭和１３年（１９３８）には当時はまだ特別史跡になる前の国史跡段階であった「常陸国分寺跡」に関して論考を発表しています。この中で栄一は礎石の配列の紹介や出土する瓦の分類などを行っていますがとりわけ「ガラミドウ」に関する報告は貴重な資料となっています。

そもそも「ガラミドウ」とは府中三丁目に残る地名で『石岡市史』中巻Ⅰに掲載されている「府中平村香丸組村明細帳」によると元禄１３年ごろにはすでに確認できるようです。これは伽藍（がらん：寺院の主要な施設のこと）の塔が変化した地名と考えられます。

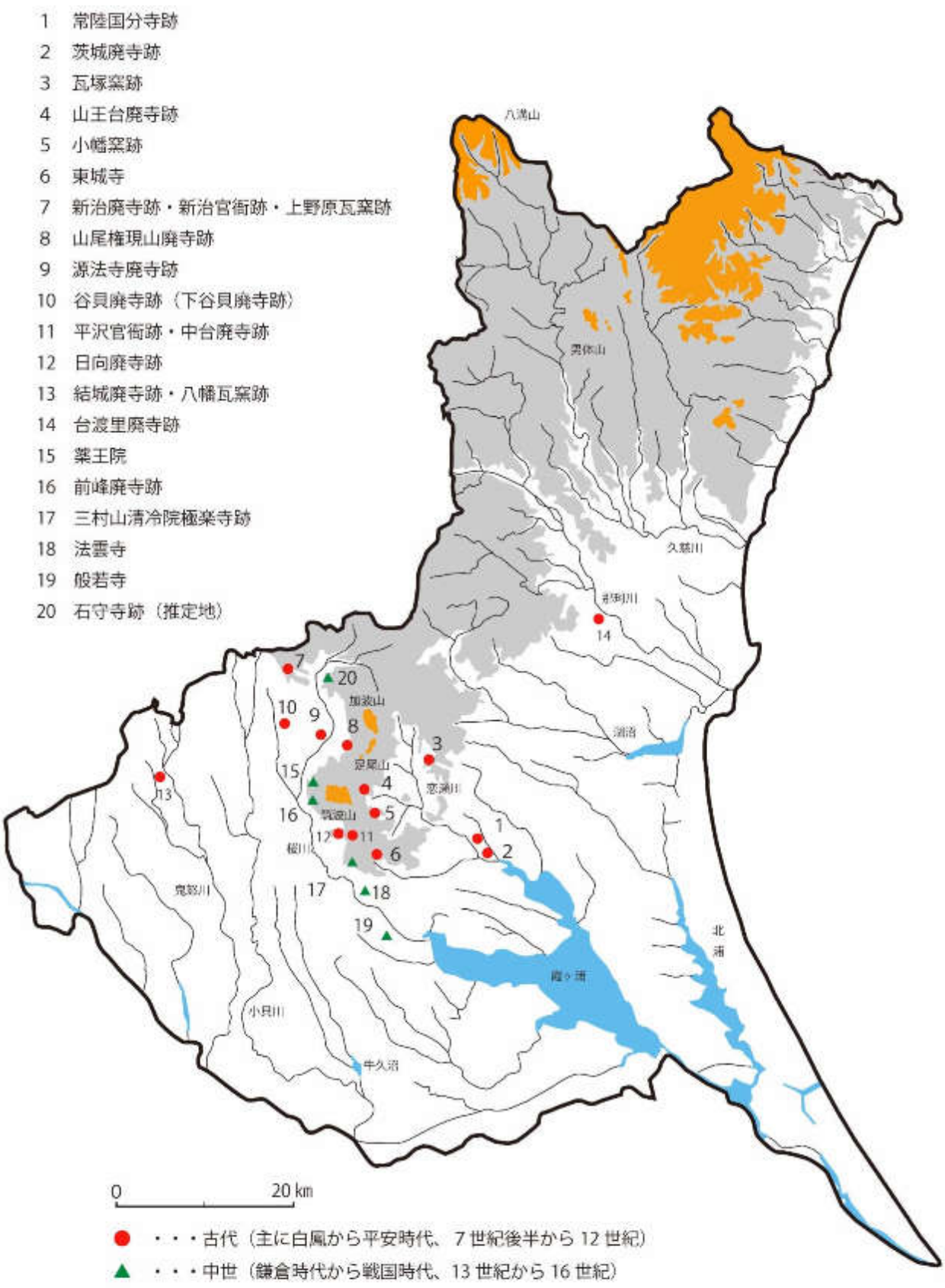
論考のなかで栄一はガラミドウには 6.5m四方の範囲に３間×３間の礎石が残されていることを報告しています。３間×３間というのは中央に心礎を配置する一般的に塔にみられる礎石配置です。その後，齋藤忠によりこれが国分寺の塔跡であると位置づけられました。さらに，当地で採集された瓦を報告した黒澤彰哉によりその瓦が９世紀半ば以降のものであったことから，国分寺創建期のものではなく，その後に建て替えられた塔跡であるという評価がなされています。

そして，令和元年（２０１９），石岡市教育委員会の手によりようやくこの地に調査が入りました。その結果，深さ 140 ㎝に及ぶ版築が確認されています。版築とは主に古代以降の主要な建築の土台に用いられた工法で，地面を突き固めて地盤を作っているものです。このことから当地には相当規模の建物が古代に存在したことが証明され，それはおそらく塔の跡と思われます。



特別史跡常陸国分寺跡ガラミドウ位置図（上）と推定塔跡の版築（下）

下の写真は上の図面の T－１の様子です。黄色と黒色と褐色の三種類の層が交互に重なっています。これが奈良・平安時代に土を突き固めながら作製された地盤の痕跡です。これを版築（はんちく）といいます。



今回の展示に関係する寺院・古代中世の遺跡

廣瀬栄一コレクション

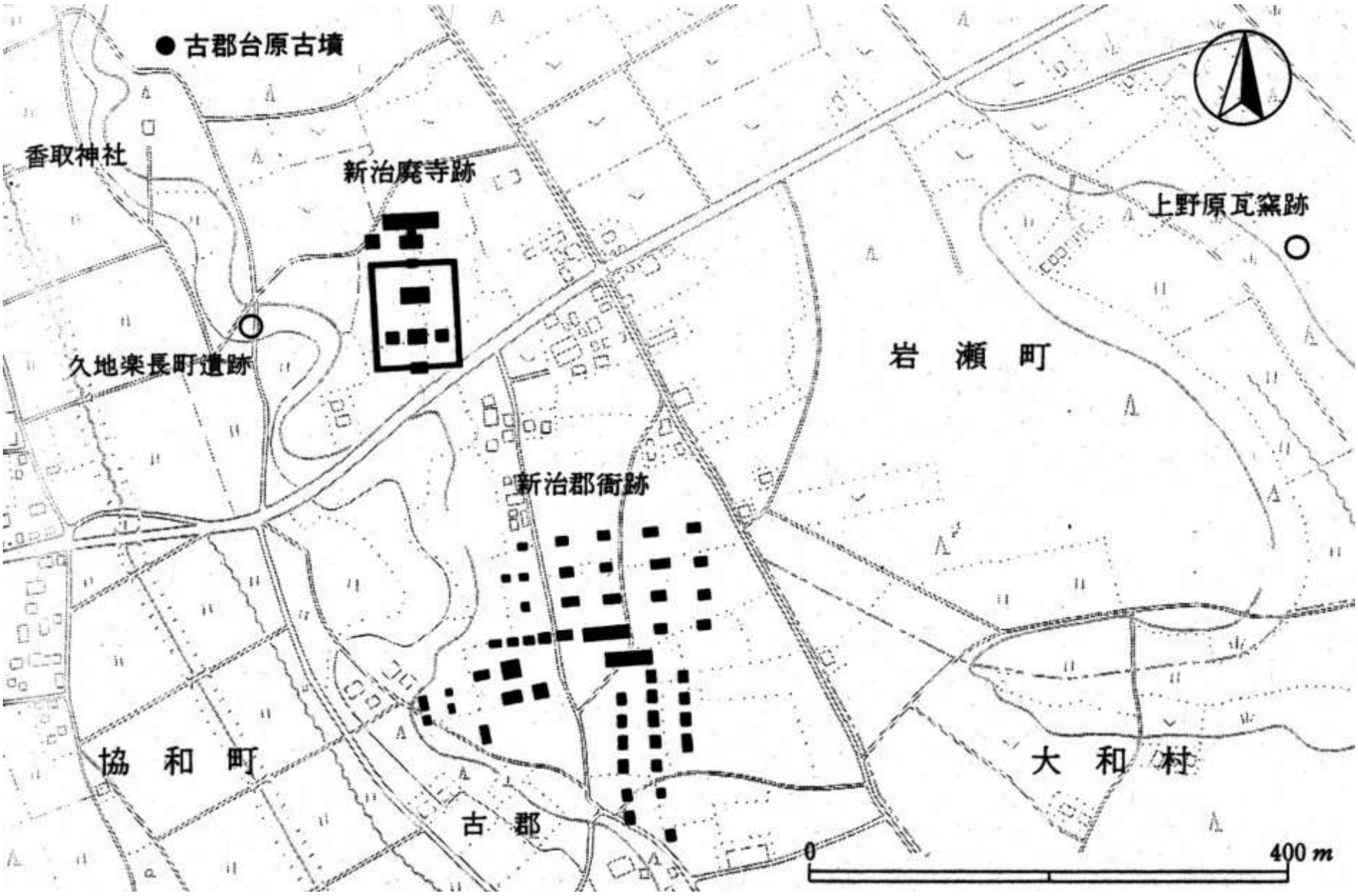
「新治廃寺跡」出土瓦

新治廃寺跡は筑西市古郡（ふるごおり）に存在する新治郡の郡寺（現在の市長に相当する郡司が管理した寺院）です。南側には新治郡衙（現在の市役所に相当）も確認され，ともに国の史跡に指定されています。

伽藍は金堂を中心としてその東西に塔を配置し，金堂の北側には講堂が確認されています。現地は現在でも基壇の盛り上がりが残っており，往時の様子が偲ばれます。軒丸瓦は複弁の蓮華文が施されています。軒平瓦には亀を上からみたような形の中心飾りがあり，そこから左右に唐草文が展開しており（下谷貝廃寺跡のパネル参照），常陸国分寺跡の軒平瓦の文様とよく似ています。したがって，８世紀半ばごろのものです。

南側の郡衙跡からは５２基の建物が検出されています。『類聚国史』に弘仁８年（８１７）に常陸国新治郡において火事があり「不動倉十三宇」が焼けた記事があり，実際の調査の結果，焼米も確認されています。

新治廃寺金堂跡の現況（左）と金堂に残る礎石（右）



新治廃寺跡・新治郡衙跡・上野原瓦窯跡位置図（原図が古いため旧町村名が入っています。）
甲陽史学会 1988『常陸国新治郡上代遺跡の研究Ⅱ』より転載

新治郡衙跡（左）と上野原瓦窯跡（右）の現況

　新治廃寺跡と同様に国の史跡に指定されています。瓦窯はこれまでの調査の結果，４基の窯跡とともに粘土塊を伴う遺構や屋外作業場と思われる建物の柱穴も確認されています。廣瀬栄一コレクションには窯跡の資料があることからもその視野の広さが分かります。

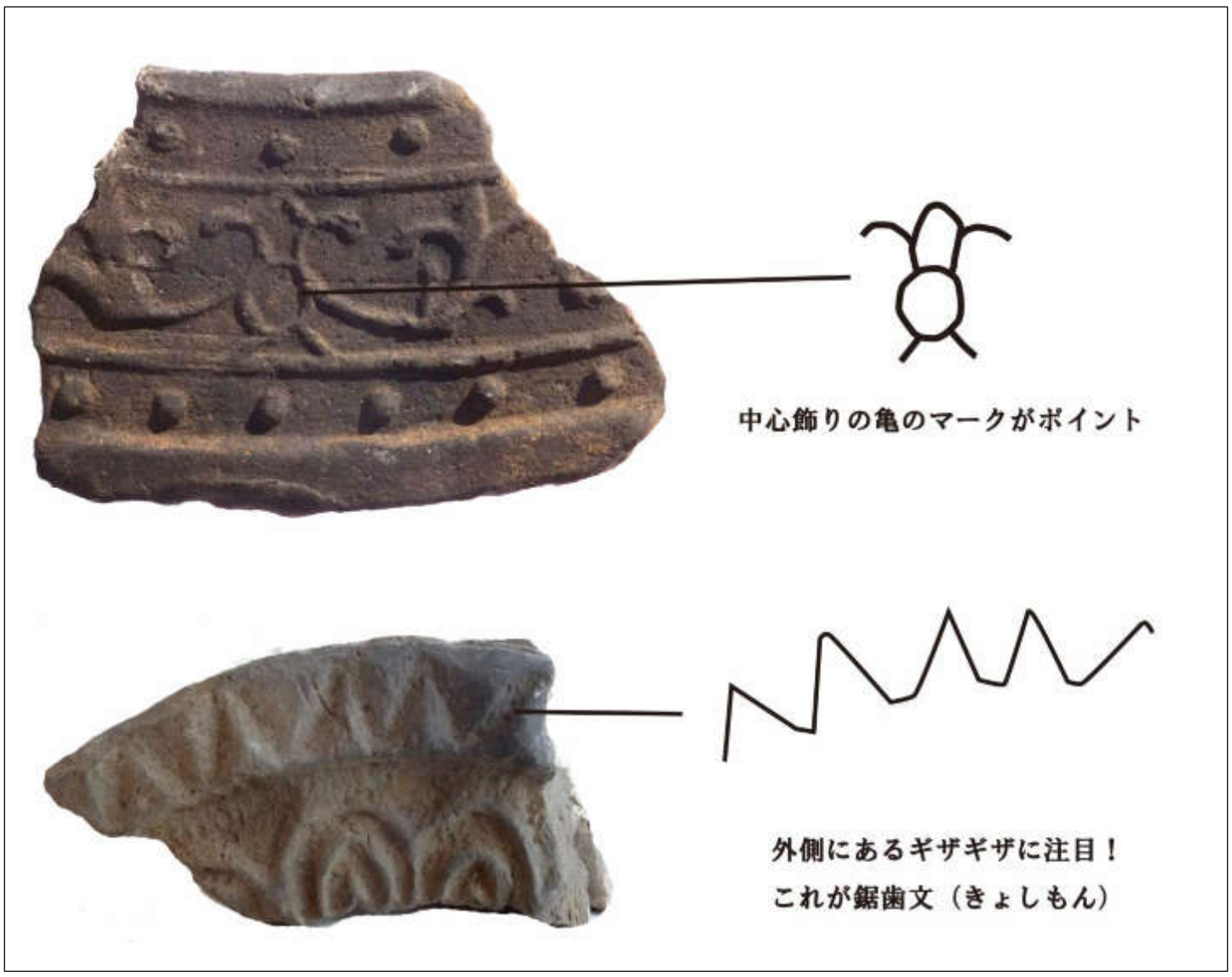
廣瀬栄一コレクション

「下谷貝廃寺跡」「源法寺廃寺跡」出土瓦

下谷貝廃寺跡・源法寺廃寺跡は現在の桜川市にあります。桜川市は古代常陸国の真壁郡に相当します。さらに，下谷貝廃寺跡は真壁郡の郡寺の可能性があります。真壁郡は古代の新治郡から分立したとされ，当初は白壁郡と称していました。その後，光仁天皇の諱（いみな：本来の名前のこと。古代は貴人の名前や死者の名前を直接口に出すことが嫌われていました。忌み名）が「白壁王」だったことから真壁郡に改名されています。

このような経緯もあり，瓦は主に新治郡から供給さています。特に唐草文の中心飾りが亀のような文様をしている軒平瓦が多く確認されています。新治廃寺同様に８世紀半ばの瓦です。

真壁郡内には古代の瓦が確認されている遺跡としてはあと１ヶ所，山尾権現山廃寺がありますが，全３ヶ所のうち２ヶ所の瓦が廣瀬栄一コレクションに存在することとなります。

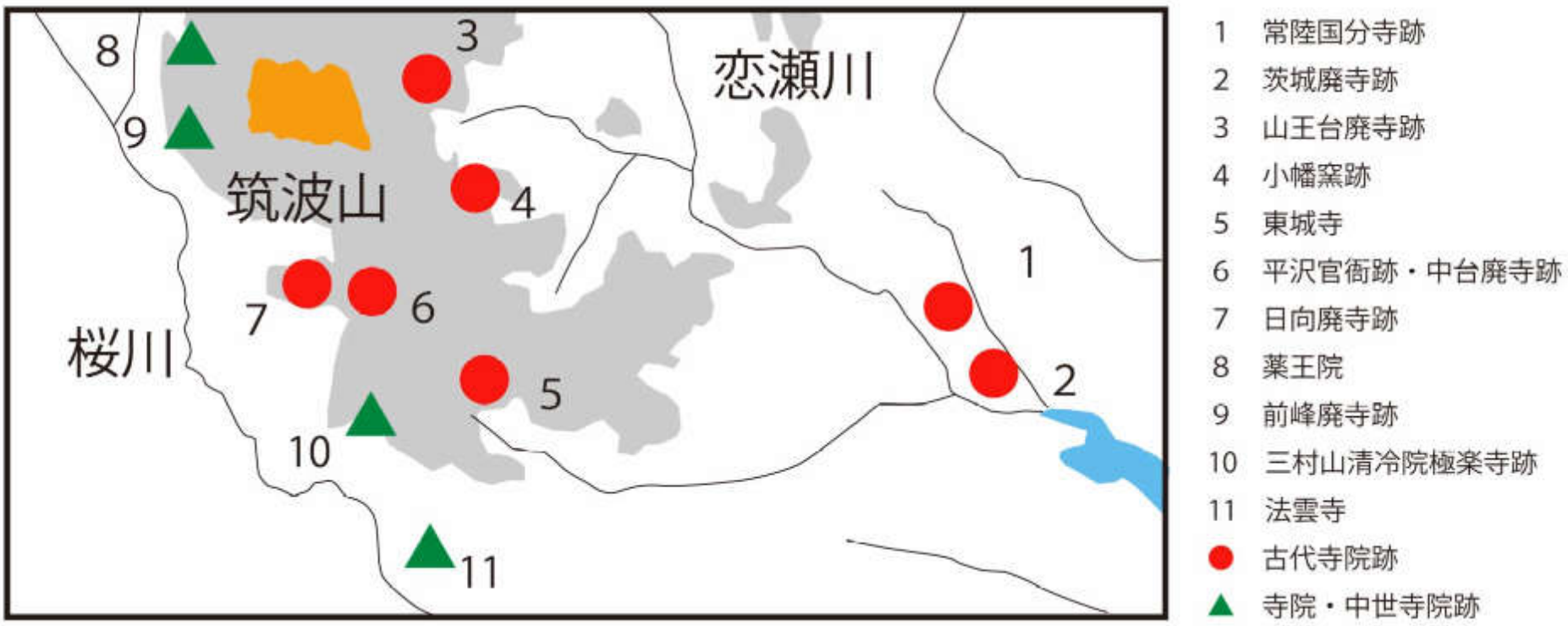


廣瀬栄一コレクション

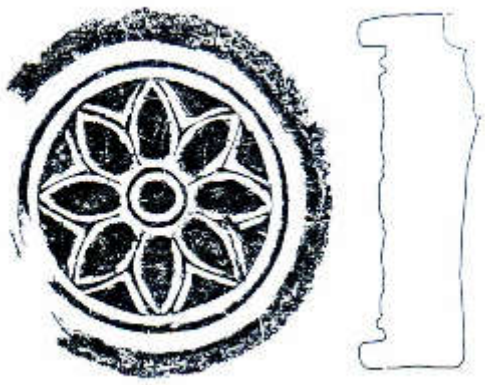
「中台廃寺跡」出土瓦

中台廃寺跡は現在のつくば市に存在します。古代の筑波郡に相当します。谷を挟んだ北東側には筑波郡衙の主要施設である正倉が確認され，国の史跡に指定されています。郡の主要な施設としては「郡庁」という郡を統括する役所，「郡寺」という郡司が管理する寺院，「正倉」という稲を蓄える倉などがあります。ここに蓄えられた稲は飢饉が起こると一般民衆に配られました。したがって，富や権力の象徴でもあることから見通しのいい立地が選ばれることが多くあります。

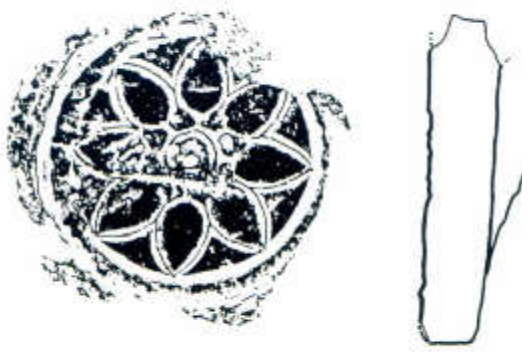
中台廃寺跡はこのうち筑波郡の「郡寺」と考えられています。７世紀後半の軒丸瓦は石岡市の茨城廃寺跡と同様の文様を持つものがあり，「筑波系」と呼ばれています。廣瀬栄一コレクションは唐草文を持つ軒平瓦があり，顎部が曲線顎であることからも常陸国分寺跡の軒平瓦に近く，国分寺が創建された８世紀半ば以降のものです。



筑波山周辺の古代中世寺院（展示に関係するもののみ）



石岡市教育委員会 2018「茨城廃寺跡」より転載



茨城県立歴史館 1994 より転載

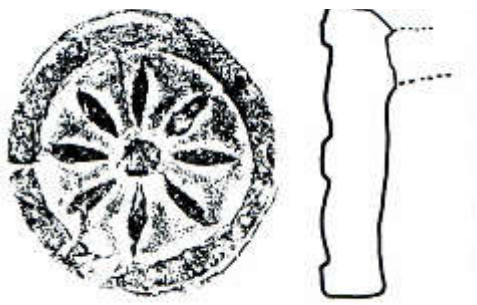
平沢官衙遺跡の現況（上），茨城廃寺跡出土軒丸瓦（右上）と
中台廃寺跡出土軒丸瓦（右下）

「東城寺」出土瓦

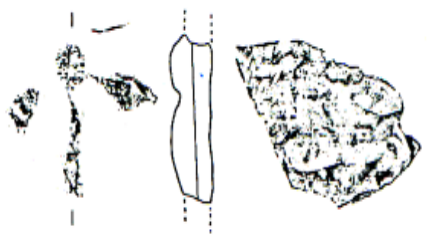
東城寺は旧新治村にある古刹で，明治年間の和田千吉による発掘調査では１２基の経塚が確認されました。銅製の経筒には保安３年（1122），天治元年（1124）の銘あり，さらに常陸平氏本宗家である多気致幹（たきむねもと）が関わっていることが記されています。古代の東城寺は現在の境内のさらに後方に存在したようです。

展示資料は素弁８葉蓮華文を残す軒丸瓦で，筑波系軒丸瓦の退化型式と思われます。茨城廃寺跡は国分寺創建以降筑波系から国分寺系へと瓦がかわります。一方で素弁８葉蓮華文軒丸瓦はこのほか石岡市小幡地区の山王台廃寺跡や小幡窯跡（６葉）にその系譜が継続すると指摘があることから筑波山周辺で葺かれる瓦へと性格が変わるのかもしれません。ただし，山王台廃寺跡の瓦に関しては佐渡国分寺跡と関連するとの指摘もありまだ決着をみていません。

東城寺（左・廣瀬コレクション）



山王台廃寺跡（茨城県立歴史館 1994 より転載）



小幡窯跡

（石岡市教育委員会 2018「市内遺跡発掘調査報告書 11」より転載）

廣瀬栄一コレクション

「台渡里廃寺跡」出土瓦

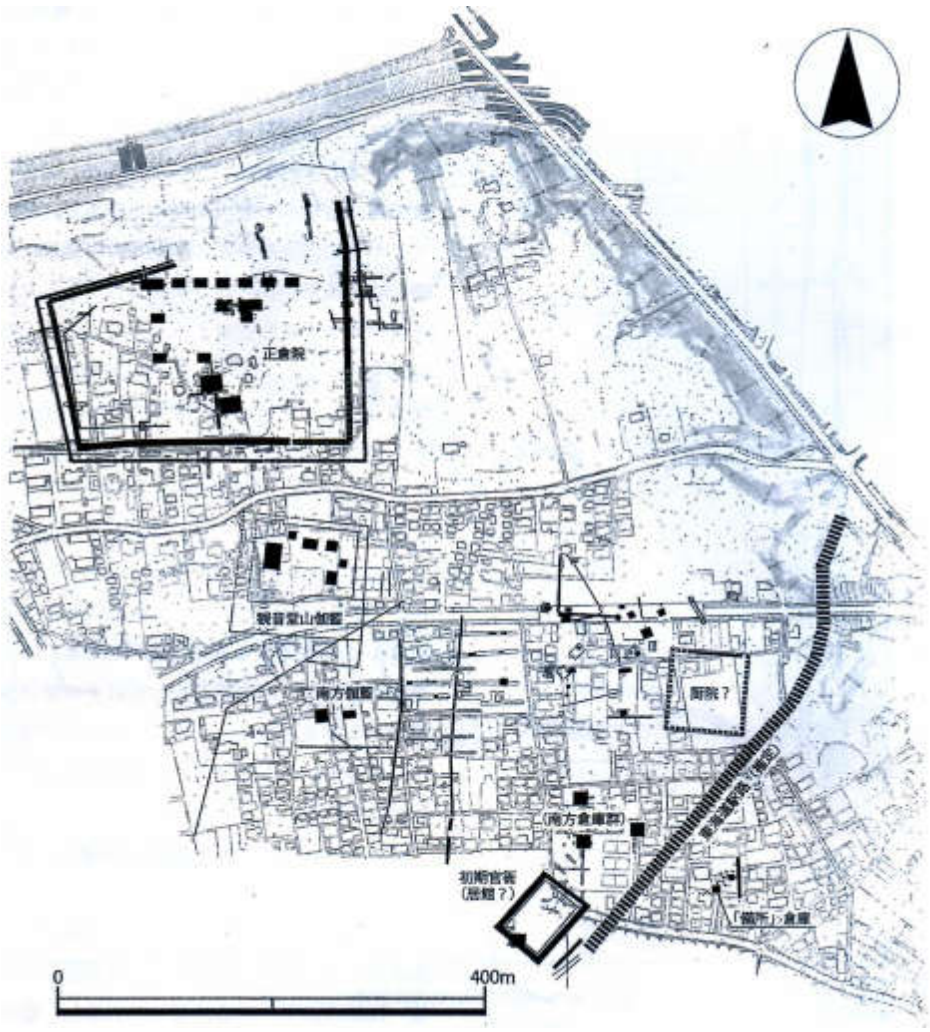
台渡里廃寺跡は現在の水戸市に存在する古代寺院で国の史跡に指定されています。水戸市は古代の那賀郡であり，台渡里廃寺は郡寺です。発掘調査では「徳輪寺」と書かれた瓦が出土し，古代寺院では珍しく当時の名称がわかるという点でも貴重です。近年の調査では寺院の北側に正倉が確認され，水戸市により公有地化も進んでいます。

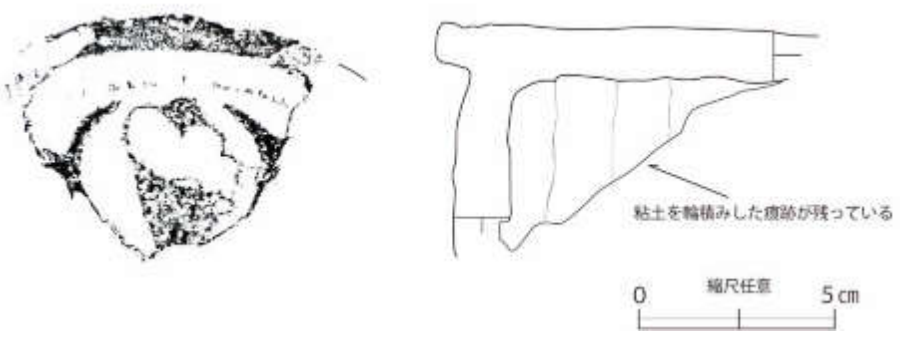
軒先の瓦は多種類の文様が確認されていますが，常陸国分寺跡や瓦塚窯跡で出土している単弁２０葉蓮華文軒丸瓦も出土しています。常陸国府で葺かれた瓦はこのほかにも新治郡や信太郡・行方郡（筑波郡もか）などで確認されており、この現象には①何等かの形で郡寺の維持に国府が関わっていた，②郡が国分寺の維持管理に関わっていた，③郡寺が必要に応じて国分寺のかわりに国家の安寧を祈願する機能を有していた（このような寺を「定額寺（じょうがくじ)」といいます）などの可能性があります。

廣瀬栄一コレクションからは破片ですが蓮華文を持つ軒丸瓦が確認できました。このタイプの瓦は過去の調査から文様のみは知られていましたが，実態は不明のままでした。現時点では実物はこれ１点ということになります。数が少なく珍しいということもありますが，より注目されるのは文様に接合する丸瓦の部分です。丸瓦は通常，桶状の道具や心棒状の道具に粘土を巻き付けて成型しますが，この瓦の丸瓦部分は内部に道具を設置しないまま，粘土紐を巻き上げて分割しています。このような製作技法を「泥条盤築（でいじょうばんちく)」といい，土器の製作技法に近いことから須恵器工人が関わっていると指摘されています。

この瓦は従来の研究で文様から９世紀以降のものと考えられてきました。那賀郡には木葉下窯跡という大きい須恵器の窯跡が

存在することから，この窯の工人が郡寺の維持管理に関わっていた可能性があります。

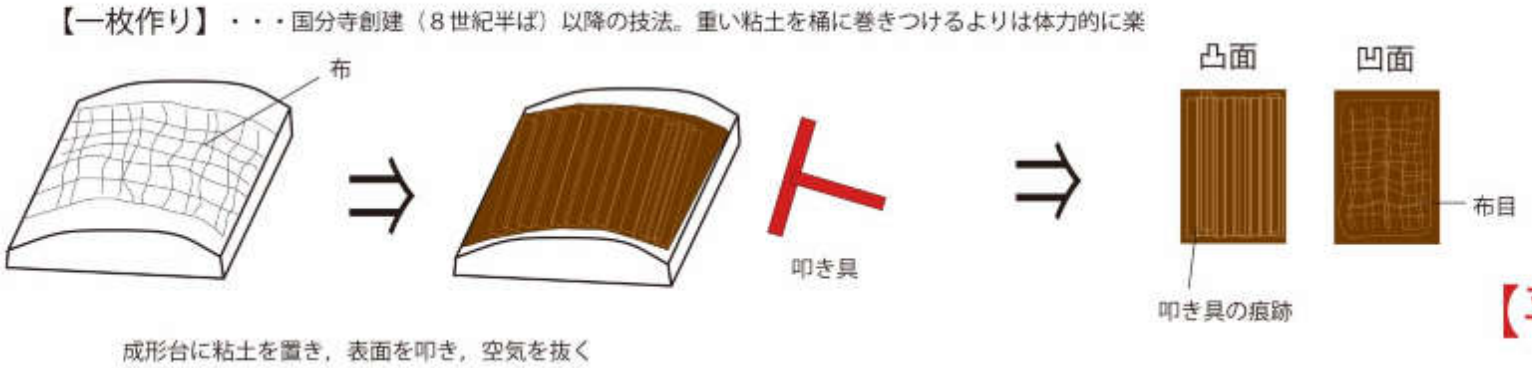




台渡里廃寺位置図（左）と蓮華文軒丸瓦（上）

台渡里廃寺は近年の調査で寺院のみではなく郡衙に関係する遺構も確認されています。軒丸瓦は一部しか確認できませんが，断面図にある輪積みの痕跡に注目してください。下の図面の「泥条盤築」という粘土を輪積する珍しい技法で作製されています。

原図は水戸市教委員会 2012『古代常陸の現像：那賀郡の成立と台渡里官衙遺跡群』。図面は渥美賢吾 2020「道・泉・倉」『世界と日本の考古学－オリーブの林と赤い台地―』から転載



【平瓦の作り方】

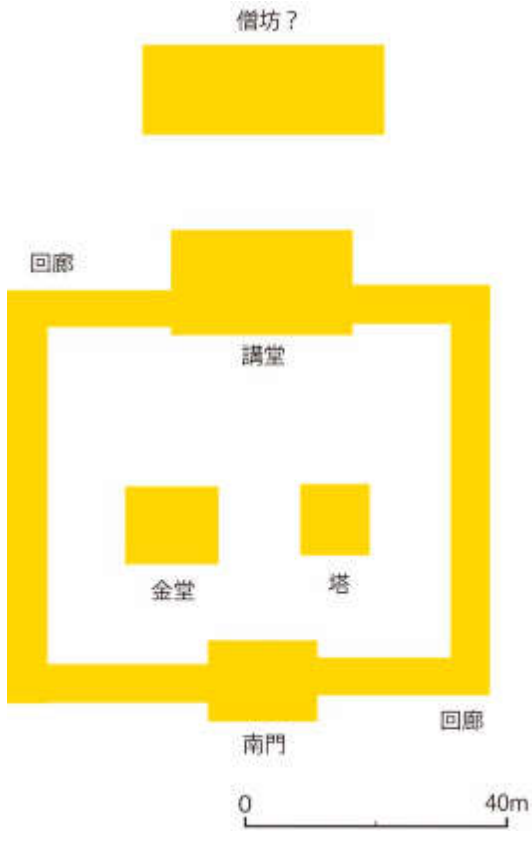
廣瀬栄一コレクション

「結城廃寺跡」出土瓦

結城廃寺跡は現在の結城市に存在します。古代は下総国に属し結城郡でした。結城市教育委員会による調査が行われ，金堂跡や塔跡，講堂跡，中門跡，回廊跡といった主要伽藍が確認されました。西に金堂，東に塔が南に向かって建つ法起寺式の配置をしていることが判明しています。文字瓦としては「法成寺」と書かれたものが出土し，台渡里廃寺跡と同様，当時の寺名が判明する貴重な資料です。さらにこの法成寺は９４０年ごろに成立したとされる『将門記』に記される「結城郡法城寺」として登場する寺院にも比定されています。出土した遺物からは８世紀初頭ごろに創建され，室町時代の 15 世紀ごろまで存続した可能性が指摘されています。

瓦は重弧文を持つ軒平瓦や外区に鋸の歯のような連続する三角形の文様，鋸歯文を持つ軒丸瓦が確認されており創建の時期を示しています。

廣瀬栄一コレクションのものは蓮華文を持つ軒丸瓦ですが，外区の鋸歯文がやや崩れ，連続した四角形となっています。創建期よりは新しい瓦と思われます。８世紀前半のものでしょうか。



結城廃寺跡現況（左）と伽藍配置（右）

廣瀬栄一コレクション

「下総国分寺跡」「下野国分寺跡」「上野国分尼寺跡」出土瓦

天平１３年（７４１），聖武天皇の命により全国に国分寺が建立されます。当時は疫病や天変地異，重臣による反乱，皇子の早世など世情が不安定であったため仏教の力で世の中を治めようとしたのです。

国分寺は正式名称を「金光明四天王護国之寺」といい男性の僧侶が 20 人配置されました。国分尼寺は正式名称を「法華滅罪之寺」といい，女性の僧侶が 10 人配置されました。

下総国分寺跡は千葉県市川市に存在します。これまでの調査で東側に金堂，西側に塔が並び，その北側に講堂が配置されるいわゆる法隆寺式の伽藍配置です。国の史跡に指定されています。さらに平成１６年（２００４）には道路建設に伴い確認された瓦窯跡などが追加指定され，名称も「下総国分寺跡附北下瓦窯跡」に変更されました。瓦の文様は宝相華文（ほうそうげもん）と呼ばれる国分寺創建期のものです。

下野国分寺跡は栃木県下野市に存在します。国指定史跡。過去の１１年にわたる調査において伽藍配置や伽藍の範囲の変遷などが確認されています。伽藍は常陸国分寺跡とよく似ていて，中門・金堂・講堂が南北に並び，中門と金堂は回廊により接続しています。展示した瓦は外区に唐草文を施した軒丸瓦と飛雲文を施した軒平瓦です。

上野国分尼寺跡は群馬県高崎市に存在します。近年，高崎市教育委員会により確認調査が行われており，尼坊跡や築地塀が確認されるなど成果があがっています。確認調査展示会の資料によると令和２年度は金堂の規模が確定しています。

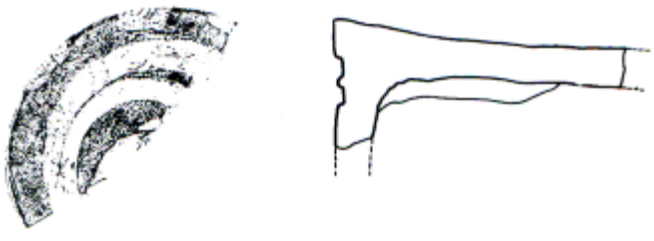
廣瀬栄一コレクション

中世の瓦（１）　巴文軒丸瓦

石岡市にある瓦塚窯跡では１０世紀にはいると瓦の生産が終了します。その後，１１世紀の瓦については常陸国では実はよく分かっていません。その後，平安時代の終わりごろになると巴文を施す瓦が出現します。巴文は一般的には水が流れる様を表現していて火事を嫌い屋根に葺くようになったと説明されますが，実は何故この時期に広がるかはよく分かっていないそうです。

そのような中でいち早く常陸国内で巴文の瓦を葺いたのが日向廃寺跡（つくば市北条）です。左巻三巴文と剣頭文軒平瓦のセットが確認されています。北条の地は多気氏という常陸平氏本宗家の本拠地であったことから，日向廃寺跡も常陸平氏の手により造営されたと考えられます。

実はこの日向廃寺跡の巴文軒丸瓦と同じ方法で作られかつよく似た瓦が石岡市で出土しています。それが常陸国分寺跡出土の巴文軒丸瓦です。常陸国分寺は県指定文化財である「税所文書」から中世以降も活動を続けていることが分かっています。このことから，この瓦についても常陸平氏の関与が指摘されています。常陸平氏は大掾という国府の役職を継いでいました。国分寺を維持することが地域支配の権威の象徴となったのかもしれません。



石岡市教育委員会 1983「常陸国分僧寺発掘調査報告－金堂・講堂跡の確認－」より転載

日向廃寺跡現況（左）と
常陸国分寺跡出土巴文軒丸瓦（上）

廣瀬栄一コレクション

中世の瓦（２）

日向廃寺とともに筑波山周辺で建てられる中世寺院として思い浮かぶのは三村山清冷院極楽寺です。この極楽寺を創建したのは忍性という律宗の僧侶です。律宗は鎌倉時代に全国的に流行した宗派で寺院の再興や港・関所の整備や管理も行っていました。極楽寺は現在，廃寺となっていますが，五輪塔や結界石などが残っており往時の様子が分かります。廣瀬コレクションのなかでは「小田尼寺入（にじいり）」と注記するものがそれと考えられます。実際に尼寺があったかは不明ですが，現在でもこの地名が残っています。

また，廣瀬コレクションの中にはつくば市上大島の前峰廃寺で確認された軒丸瓦があります。梵字を施した瓦です。梵字は一文字一文字が仏を表し，この瓦には「キリーク」という文字が書かれています。現在，前峰廃寺の実態は全くの不明であり，資料も少ないのが現状です。この梵字文の瓦もかつて高井悌三郎が『茨城県史研究』の 43 巻で紹介したものが知られているのみです。現物が確認できるのはこの展示中のものだけですので，台渡里廃寺跡の瓦と同様，多変貴重な資料といえるでしょう。

三村山極楽寺の現況（左）と
極楽寺にある五輪塔（上）

極楽寺は田んぼの上の台地の平坦面のあたり。周囲には鎌倉時代の五輪塔や石造地蔵菩薩．山頂に宝篋印塔が残る。

廣瀬栄一コレクション

中世の瓦（３）

最後に廣瀬コレクションのなかから中世の軒平瓦について解説します。（２）で触れた前峰廃寺（つくば市）の梵字を施す軒丸瓦に伴うと思われるのが連珠文の軒平瓦です。１３世紀半ばから後半ごろのものです。

また，同じ連珠文としては椎尾山薬王院（桜川市）のものが確認されています。忍性は本人の墓が分かっていますが，その骨壺には常陸国の薬王院に宝塔を建立した旨が記されています。この薬王院が椎尾山薬王院のことと思われますが，宝塔に関する実態は分かっていません。時代は１３世紀半ばから後半にかけてのものです。

次に「松田　石森寺」と注記された軒平瓦も確認されています。石守寺（桜川市）は現在，廃寺となっていますが仏像が現在に伝わり市の指定文化財となっています。中世までさかのぼる瓦はこれまでこの瓦以外は確認されておらず，波状文を持つ軒平瓦が軒丸瓦とセットで確認されたことは大変貴重な成果です。ともに室町時代の１５世紀半ばの資料です。波状文はこの時期広く広がる文様です。

法雲寺は土浦市にある小田氏所縁の寺院です。もとは正受庵と呼ばれる草庵でしたが文和３年（１３５４）に法雲寺と号しました。展示されている軒平瓦は波状文で，１５世紀半ばのものです。法雲寺は天正年間に兵火にあっていることから展示中のものも含め火を受けた瓦が多いのも特徴です。鬼瓦は一部ですが，そもそも屋根の一部にしか使用されないため，作られる点数が少ない瓦であり，特に貴重な資料といえます。

廣瀬栄一コレクション

姫路城－近世の瓦－

江戸時代以降になると桟瓦（さんがわら）という丸瓦と平瓦をひとつにした瓦が生産され，民家にも瓦が普及します。それに加えて大名屋敷や城郭では大名所縁の家紋を施した瓦が葺かれます。建物を立派に飾り付けることが権威の象徴となりました。ここでは廣瀬栄一コレクションから姫路城の瓦を紹介します。

揚羽蝶（あげはちょう）は平氏の家紋として広く用いられており，ここでは池田氏が該当します。関ケ原の合戦後の慶長５年（１６００），姫路城に入った輝政が現在の姫路城の基礎を作りました。瓦は滴水文という逆三角形をした瓦で軒平瓦のように軒先に葺かれたものです。

源氏車は徳川家の重臣・榊原氏の家紋です。姫路城では慶安２年（１６４９）に榊原忠次が城主となっています。

剣片喰（けんかたばみ）はハートの形をしたカタバミの葉の間に先の尖った剣状の文様が施された家紋で，姫路城では酒井氏の家紋です。寛延２年（１７４９）に酒井忠恭（さかいただずみ）が入ります。この後は明治３年（１８６９）に版籍奉還で国有化されるまでは代々酒井家により治められました。

ちなみに石岡市内では常陸平氏に所縁のある平福寺において揚羽蝶の家紋が，佐竹氏に所縁のある清涼寺において扇に月丸の家紋が，府中松平家に所縁のある照光寺や陣屋門においては三つ葉葵の家紋が葺かれています。

※　姫路城歴代城主に関しては姫路市公式ホームページ（姫路城公式サイト）を参考にしています。

おわりに

これまでみてきたように，廣瀬栄一の活動は古代の郡寺や国分寺，中世寺院にとどまらず近世の姫路城とコレクションは全国にわたっています。また，常陸国分寺跡に関することだけではなく，『考古学雑誌』といった学術雑誌にも論文が掲載されています。戦後は発掘調査に中学生に参加させるなどその普及にも尽力しました。全体として保護・研究・活用といった広い視野にたち活動していたことが分かります。石岡市にはこれら以外にも縄文土器など貴重な資料がまだ寄贈されています。今後はこれらの資料に関しても有効に活用をはかってまいりたいと思います。

また，今回の展示にあたりましては下記の方々にご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。
（アイウエオ順・敬称略）
石川日出志・川合剛・寺崎大貴・比毛君男・廣瀬淳一・廣瀬慶之助・石岡市立中央図書館・茨城県考古学協会古代瓦シンポジウム実行委員会・桜川市教育委員会・つくば市教育委員会・名古屋市博物館・水戸市教育委員会・結城市教育委員会

【参考文献】

茨城県教育委員会　1954『茨城の文化財』
高井悌三郎　1979「常陸・下野の中世瓦瞥見」『茨城県史研究』43　茨城県史編集委員会
石岡市史編さん委員会　1979『石岡市史　上巻』石岡市
石岡市史編さん委員会　1983『石岡市史　中巻Ⅰ』石岡市
茨城県史編集委員会　1985『茨城県史　原始古代編』茨城県
新治村史編纂委員会　1986『図説新治村史』新治村教育委員会
茨城県立歴史館　1994『茨城県における古代瓦の研究』学術調査報告書４
茨城県史編集委員会　1995『茨城県史料　考古資料編　奈良・平安時代』茨城県
茨城県立歴史館　2013『筑波山－神と仏の御座す山－』平成 24 年度特別展
かみつけの里博物館　2013『上野国分寺　瓦にこめられた祈り　住谷コレクションを中心とした古代瓦』第 22 回特別展
昼間　孝志・宮原正樹　2015「常陸国南部における古代寺院の展開－国分寺軒瓦の分布から見た寺院の在り方－」『研究紀要 29』公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
昼間　孝志　2018「須恵器工人の瓦づくり－泥条盤築技法導入の背景－」『研究紀要 32』公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
比毛　君男　2019「常陸」『中世瓦の考古学』高志書院
上高津貝塚ふるさと歴史の広場　2020『古代から中世へ－常陸における社会と文化の変動期－』第 23 回企画展展示図録
高崎市教育委員会　2020『上野国分尼寺跡　確認調査展示会』展示会資料

展 示 品 一 覧

	展示品名	遺跡名	時　期	写　真	所有者
1	発掘調査報告書	権現山古窯址	昭和40年(1965) 刊行		個人蔵
2	軒丸瓦	新治廃寺跡	飛鳥から奈良時代		石岡市
3	軒丸瓦・軒平瓦	下谷貝廃寺跡	飛鳥から奈良・平安時代		石岡市
4	軒平瓦・軒丸瓦	中台廃寺 (左)・ 東城寺(右)	奈良・平安時代		石岡市
5	軒丸瓦	台渡里廃寺跡	奈良・平安時代		石岡市
6	軒丸瓦	結城廃寺跡	奈良・平安時代		石岡市
7	軒平瓦	下総国分寺 跡・上野国分 尼寺跡	奈良・平安時代		石岡市
8	軒丸瓦	前峰廃寺 (左)・ 石守寺跡(右)	鎌倉時代(左)・ 室町時代(右)		石岡市
9	鬼瓦・軒平瓦	法雲寺・般若 寺	中世(左)・ 鎌倉時代(右)		石岡市
10	軒丸瓦・滴水瓦	姫路城	江戸時代		石岡市

※ 遺物の縮尺は任意

石岡市立ふるさと歴史館　第24回企画展

廣瀬栄一コレクション

―瓦編―

令和３年１月６日発行

編集・発行
石岡市教育委員会　文化振興課
〒315-0195
茨城県石岡市柿岡 5680-1
TEL 0299-43-1111

石岡市立ふるさと歴史館
〒315-0016
茨城県石岡市総社 1-2-10
TEL 0299-23-2398